

# 第3章 多気志楼物の流行①

武四郎は生涯で6度にわたって蝦夷地を調査し、調査報告として『初航蝦夷日誌』(全12巻)・『再航蝦夷日誌』(全15巻)・『三航蝦夷日誌』(全8巻)、『丙辰日誌』(全31巻)・『丁巳日誌』(全24巻)・『戊午日誌』(全61巻)を残しました。調査を終えて江戸に戻った武四郎は、これら全151冊の報告書をもとに、庶民でも分かりやすいように挿絵や詩歌を交えた紀行文『東西蝦夷山川地理取調日誌』(全23冊)を出版します。これら武四郎の出版物は「多気志楼物」(たけしろもの)と呼ばれ、江戸ばかりでなく、大阪や京都でも大流行しました。その理由としては、文章に多少の創作を加えたり、伝説を多く盛り込むことで、ストーリーをより面白く仕立てる工夫や、難解な動植物にはフリガナを振って読みやすくする配慮など、編集出版者としての武四郎の才能が大きいと言えます。

## 武四郎の創作



『石狩日誌』によると、武四郎は安政4(1858)年閏5月2日に石狩岳に登ったとされていますが、箱館奉行所に提出した報告書『丁巳日誌』に登山の記載はありません。

行程から推測するに、石狩岳に登ったとは考えにくいことから、武四郎がストーリーに厚みを持たせるため、アイヌ民族から聞き取った内容をもとに、自分が登ったかのように創作して書かれています。

石狩岳山頂の図～『石狩日誌』より

## 神話の引用



カムイロキの図  
～『十勝日誌』より

『十勝日誌』には、侵食により生まれた巨大な岸壁は「カムイロキ」と呼ばれており、「神が座る場所」を意味すると書かれています。

また、昔、アイヌ民族が岩壁の上から縄を降ろし、それを伝ってこの洞穴に入ったところ、戻ってこなかったというエピソードも添えられており、読者の興味を引く内容となっています。

## 読みやすい配慮



『知床日誌』より

水豹(アザラシ=アイヌ語でツーカー)、厚消(アッケシ=厚岸)、久摺(クスリ=釧路)など、蝦夷地のことをよく知らない読者でも読みやすいよう、フリガナやアイヌ語読みが書かれています。